

Title	無助詞構文の構文文法的考察
Author(s)	松浦, 幸祐
Citation	日本語・日本文化研究. 2020, 30, p. 106-120
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77709">https://hdl.handle.net/11094/77709</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 無助詞構文の構文文法的考察

松浦 幸祐

## 1. はじめに

本稿は、日本語の無助詞構文の分析モデルに関する議論を行うものである。先行研究（Yamaizumi 2011, 2018, 山泉 2013）では、(1a) のような構文（無助詞構文）は (1b) の構文（左方転位構文）の「それを」などがゼロになったものであると分析するモデルが提案されている。本稿の目的は、そのモデルに残された問題点を解決するために、無助詞構文の新たな分析モデルを提案することにある。

- (1) a. くつべら使う？（山泉 2013:449）
- b. くつべら {それを/それは} 使う？

本稿の構成は以下の通りである。まず、第2節で、上述のモデルと、それに関連する先行研究を概観する。第3節では、そのモデルに観察される2つの問題点を確認する。その問題点の解決方法を探るために、第4節で、日本語の名詞修飾節に関する議論を見る。第5節では、構文文法（Croft 2001 など）における「構文」の概念を基に、無助詞構文が形式と意味の組み合わせから成るユニットを形成しているというモデル、より具体的には「無助詞構文の成立に貢献するのは、代名詞的要素ではなく、無助詞構文が持つ構文的意味である」というモデルを提案する。第6節はまとめである。

## 2. 先行研究

本節では、日本語の無助詞構文に関する先行研究と、英語の左方転位構文に関する先行研究を整理した上で、無助詞構文を左方転位構文として分析する先行研究を取り上げる。

### 2. 1. 無助詞構文について

まずは、(2)(3) のように、助詞を伴わない名詞句を含む文に関する先行研究を整理する。ただし、そのような先行研究は非常に多くの蓄積があるため、ここでは、先行研究で共有されている2点を確認し、本稿の分析対象を定めるのみとしておく。

- (2) 雨 $\phi$ 降ってる。（丹羽 2014:602）
- (3) 私 $\phi$ 知ってます。（丹羽 2014:602）

先行研究における共有事項の1点目は、(2)(3) の「雨」や「私」のように助詞を伴わな

い名詞句に、(4) の 2 種類があるという点である。加藤 (2003) や 荻宿 (2014) によれば、多くの先行研究 (長谷川 1993、黒崎 2003、丹羽 2006 など) で、助詞を伴わない名詞句に関して、分類の名称等に違いはあるものの、おおよそ (4) の 2 種類が設定されているという。また、(4b) の「無助詞」名詞句が持つ意味とは、主題的機能であるとされる。

(2) と (3) で具体的に説明しよう。まず、(2) は、例えば格助詞ガを補い「雨が降ってる。」としてもそれほど意味が変わらないため、(4a) の「助詞省略」とされる。これに対して、(3) は、格助詞ガを補い「私が知ってます。」とした場合、無助詞の「私 $\phi$ 」が果たしていた主題的機能とは異なる意味を表してしまうため、(4b) の「無助詞」とされる。

- (4) a. 助詞省略：助詞を伴わない名詞句に助詞を補っても意味が変わらない場合  
b. 無助詞：助詞を伴わない名詞句に助詞を補うと意味が変わる場合

(いずれも 荻宿 2014:148 に基づく規定)

先行研究における共有事項の 2 点目は、無助詞名詞句に関して、その後ろに節が続いて生じることが想定されている点である。したがって、無助詞文は、(5) のような表示が想定されることがある (cf. 三枝 2005 など)。(3) で言えば、「私」が X に相当し、「知ってます」が後続節 Y に相当する。また、「X $\phi$ 」は X に助詞が伴わないことを表す。

- (5) [[X $\phi$ ]<sub>NP</sub> [Y]<sub>CLAUSE</sub>]

本稿では、(5) の形式をとり、「X $\phi$ 」が「Y」に対して主題的機能を果たしていると言えるものをひとまず「無助詞構文」と呼び、以下での分析対象とする。

## 2. 2. 左方転位構文について

続いて、左方転位構文 (left dislocation または left detachment) に関する先行研究を整理する。特に、英語の左方転位構文の機能について、また、左方転位構文と主題化構文 (topicalization) との機能上の相違について論じる研究を重点的に取り上げる。

まずは、英語の左方転位構文と主題化構文の形式的区別を確認しておこう。この 2 つの構文は、後続節内の代名詞の有無によって区別できる。例えば、(6a) は左方転位構文、(6b) は主題化構文の例であるが、(6a) の後続節には “This movie” と同一指示の代名詞 “it” が生起するのに対して、(6b) では同じ位置に代名詞が生起せず、空所となっているのである。

- (6) a. [This movie]<sub>i</sub>, I saw it<sub>i</sub> when I was a kid.  
b. [This movie] I saw \_\_\_ when I was a kid.

(いずれも Lambrecht 2001:1052 ラベル等は原文による)

## 2. 2. 1. Lambrecht (1994, 2001)

では、Lambrecht (1994, 2001) による左方転位構文の機能の説明を見ていこう。Lambrecht によれば、左方転位構文は、その機能に関して「指示対象を Topic Acceptability Scale 上の accessible の状態から active の状態 [...] へと昇格させるために用いられる文法的装置であると語用論的に定義できる」とされる (Lambrecht 1994:183 訳は本稿筆者による<sup>1)</sup>)。

なお、Topic Acceptability Scale とは、図1のような「主題の指示対象の活性度・同定可能性の状態と、文の語用論的容認性との一般的な対応関係」である (Lambrecht 1994:165 訳は本稿筆者による<sup>2)</sup>)。つまり、名詞句の指示対象の談話内での活性度 (図の左側) が低くなると、その指示対象を主題として含む文の容認性 (図の右側) も低くなるということである。例えば、活性度が accessible の指示対象は、活性度が active の指示対象に比べてより多くの認知的負荷がかかるため、主題としての容認性がやや低くなるということになる。

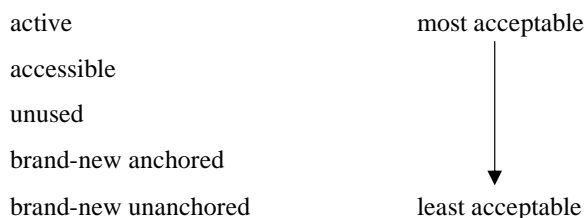


図1 : Topic Acceptability Scale (Lambrecht 1994:165)

図1の関係を踏まえた上で、左方転位構文の機能を見てみよう。例えば(7)では、最終文で左方転位構文が使われているが、その発話時点では、転位名詞句 (detached NP) の指示対象“(a) wizard”の活性度は、accessibleの状態であると言える。なぜなら、“(a) wizard”は、最初の文で導入され active になった後、他の指示対象 (“the first son” など) が active になることで、活性度が降格するからである。その降格した活性度を再び active の状態に昇格し、主題として容認されやすくする働きを担うのが左方転位構文というわけである。

- (7) Once there was a *wizard*. *He* was very wise, rich, and was married to a beautiful witch. They had two sons. The first was tall and brooding, he spent his days in the forest hunting snails, and his mother was afraid of him. The second was short and vivacious, a bit crazy but always game. Now *the wizard*, *he* lived in Africa. (Lambrecht 1994:177 斜字は原文による)

ここで、後の議論のために、Lambrecht (1994, 2001) が非連結主題構文 (unlinked topic construction) と呼ぶ構文についても確認しておく必要がある。この構文は、(8)(9)のように、転位名詞句に対応する代名詞が後続節に現れ得ず、したがって転位名詞句が後続節に

対して意味的・統語的な関係を持たないという特徴を持つ。

(8) (From a TV interview about the availability of child care)

That isn't the typical family anymore. The typical family today, the husband and the wife both work. (Lambrecht 1994:193)

(9) (Talking about how to grow flowers)

Tulips, you have to plant new bulbs every year? (Lambrecht 1994:193)

そして、Lambrecht (2001) によれば、この構文における転位名詞句と後続節との関係は、「関連があること (relevance)」という語用論的なものであるという (Lambrecht 2001:1058)。「関連がある」とは、ある述べ立てが「現在の関心事について情報を与えたり加えたりする」ことだと考えられる (Strawson 1964:97, Lambrecht 1994:119 訳は本稿筆者による<sup>3</sup>)。

(8) の例で言えば、転位名詞句 “the typical family” が後続節 “the husband and the wife both work” との間に照応関係などを持たないにもかかわらず、この例が解釈可能であるのは、後続節が転位名詞句に関連のある情報を述べていると解釈されるためであると言える。(9) についても同様である。

## 2. 2. 2. Gregory and Michaelis (2001)

左方転位構文と主題化構文の機能の違いを実証的に示した研究として、Gregory and Michaelis (2001) がある。Gregory and Michaelis (2001) は、左方転位構文に「主題設定 (topic establishment)」や「主題昇格 (topic promotion)」の機能があることを示す中で、コーパスの調査結果から、主題化構文は左方転位構文に比べて前置名詞句の指示対象の活性度が高いことを明らかにしている<sup>4</sup> (Gregory and Michaelis 2001:1693)。

左方転位構文と主題化構文とで好まれる活性度に差が見られることは、(10) の例で具体的に観察できる。(10A) と (10A') では、どちらも照応詞の “that” が用いられているが、左方転位構文を用いた (10A') は容認されない。なぜなら、「主題昇格」の機能を持つ左方転位構文は、すでに active な指示対象を指す照応詞 “that” とは相容れないからである。

(10) Context: A has just outlined some possible policies for local school board.

B: Uh huh. That's some pretty good ideas. Why don't you do something with those? You should run for a local school board position.

A: **That I'm not so sure about**  $\emptyset$ . I've got a lot of things to keep me busy.

A': \***That I'm not so sure about it**. I've got a lot of things to keep me busy.

(Gregory and Michaelis 2001:1669 太字は原文による)

実際に、Gregory and Michaelis の調査では、主題化構文の名詞句は 25% が照応的代名詞であったのに対して、左方転位構文の転位名詞句には照応的代名詞が 1 つも現れなかったという (Gregory and Michaelis 2001:1670)。

### 2. 3. 左方転位構文から見た無助詞構文

最後に、先行研究による日本語の無助詞構文の分析モデルを確認しておこう。この構文を通言語的に適用可能な枠組みで分析した先行研究は、管見の限り、山泉によるもの (Yamaizumi 2011, 2018, 山泉 2013) のみである。

山泉 (2013) は、無助詞構文と左方転位構文とが構造上も機能上も類似していることから、(11) の分析モデルを提案している。本稿では (11) のモデルを「左方転位モデル」と呼び、以下で詳しく見ていく。

- (11) 「主題的機能のある無助詞名詞句は、pronominal がゼロになった左方転位要素である」(山泉 2013:450)

左方転位モデルによる分析を見るために、まずは、山泉 (2013) における「日本語の左方転位構文」の構造と機能について確認しておこう。山泉 (2013) は、Lambrecht (2001) による左方転位構文の定義を採用し、左方転位構文を (12) のように定義する。また、左方転位構文が典型的には (13) の構造を持つことから、山泉 (2013) は左方転位構文の構造を (14) のように表示する。(14) では、左方転位要素 (Left-Dislocated Element, これまでの「転位名詞句」に相当) が節 (cl) の左側にあり、それと同一指示の代名詞的要素 (pronominal) が節の中に生起することが示されている。

- (12) 「述語-項の構造の中で項または付加詞として機能しうる指示的な構成素が、述語を含む節の境界を越えて、その左側に生起している文構造」 (Lambrecht 2001:1050 訳は山泉 2013 による)
- (13) 「転位された構成素が表わすものが述語の項または付加詞として果たす役割は、その節の中で代名詞的要素によって表され、その要素は、転位された句と同一指示と解釈される」 (Lambrecht 2001:1050 訳は山泉 2013 による)
- (14)  $LDE_{icl}[\dots pronominal_i, \dots]$  (山泉 2013:432 ラベル等は原文による)

例えば (15) では、「原稿の締め切り日」と同一指示の代名詞的要素「これ(を)」が後続節中に形を伴って生起している。したがって、(15) は左方転位構文の構造を持つと言えるのである。

(15) 特に原稿の締め切り日<sub>LDE</sub> これ<sub>pro</sub>を厳守として決定するということです

(山泉 2013:433 下線とラベルは原文による)

しかし、山泉 (2013) では、日本語の左方転位構文を規定する際、2. 2節で触れた主題化構文との区別が問題となるとされている。つまり、日本語では一般に代名詞的要素がゼロになり得るため、左方転位構文の代名詞がゼロになっているものと、そもそも代名詞を挿入できない主題化構文とが区別できなくなってしまうということである。したがって、山泉 (2013) は、左方転位構文と主題化構文の区別のために (16) の基準を設定する<sup>5</sup>。この基準は、本稿でも後の議論で重要となる。なぜなら、左方転位モデルにおいて、無助詞構文は左方転位構文であるという分析を構造上保証するものが (16) の基準だからである。

(16) 「前置された要素と同じインデックスを持つ *pronominal* にあたる名詞的要素が形を伴って存在していないものでも、代名詞+格助詞を *pronominal* として節の中に入れようとすれば入れられるものは左方転位とみなす」(山泉 2013:435)

続いて、山泉 (2013) における左方転位構文の機能についても確認しておこう。山泉以前の研究では、2. 2節で見たように、左方転位構文の転位名詞句は主題設定のみを行うという見解で一致していた。しかし、山泉は、(17B) に見られるように、左方転位構文の転位名詞句が焦点を設定する場合もあることから、(18) を提案している。なお、(18) の「アナウンスする」とは、ここまで本稿が用いてきた「設定する」と同様の機能である<sup>6</sup>。

(17) A : 誰が一郎の母ですか。

B : 山田花子<sub>LDE</sub>、彼女<sub>pro</sub>が母です。(山泉 2013:439 下線とラベルは原文による)

(18) 左方転位構文の転位名詞句の機能は、「何らかの情報構造的役割 (主題や焦点) をアナウンスすること」である。(山泉 2013:441)

ここで、(11) のモデルを想起されたい。このモデルでは、無助詞構文は代名詞的要素がゼロになった左方転位構文であると分析されるのであった。しかし、山泉が (17'B) の例を挙げるように、焦点を設定する左方転位構文では、代名詞的要素の生起が義務的である。したがって、左方転位モデルでは、無助詞構文に話を限定すれば、無助詞名詞句は主題を設定する機能のみを持つことになる。これによって、無助詞名詞句の機能である主題的機能と、左方転位構文の機能である主題の設定とが類似していると保証されるわけである。

(17') A : 誰が一郎の母ですか。

B : ?山田花子<sub>LDE</sub>、母です。(山泉 2013:439 下線とラベルは原文による)



まとめとして、無助詞構文(19a)を用いて、左方転位モデルの要点を整理してみよう。(19a)は、左方転位構文である(19b)の代名詞的要素がゼロ化したものと分析される。なぜなら、構造上、(19a)は(19b)から「それを」がゼロ化したものと一致し、機能上も、(19ab)の「この手袋」はどちらも後続節に対して主題を設定していると言えるからである。

- (19) a. この手袋、誰が買ってくれたの？  
b. この手袋、誰がそれを買ってくれたの？ (いずれも山泉 2013:451)

### 3. 左方転位モデルに残された問題点

以上で見たように、左方転位モデルは無助詞構文を新たな観点から扱う道を拓いたものとして、非常に意義があると言える。しかし、このモデルには、次の2つの問題点が残されている。1つは、左方転位モデルでは扱えない例が存在する点であり、もう1つは、代名詞的要素を復元すると不自然に響く例が存在する点である。

#### 3. 1. 左方転位モデルでは扱えない例の存在

2. 3節で確認したように、左方転位モデルでは、(16)を満たすことが分析対象の基準となっている。しかし、この基準によって、左方転位モデルには、Yamaizumi(2018)が(20)で指摘する「限界」が生じることとなる。

- (20) 「この [(16) の] 基準には、Lambrecht (2001) が非連結主題構文と呼ぶ、[...] 転位要素が後続述語に対して意味・統語的關係を持たず、項や付加詞としての役割を果たさないものについては有効に働かないという点において、限界がある。」  
(Yamaizumi 2018:83 脚注8 訳は本稿筆者による<sup>7)</sup>)

具体的には、例えば(21)では、「昨日話してた旅行」と同一指示の代名詞的要素が後続節内に復元され得ない。したがって、(21)は(16)の基準に当てはまらず、左方転位モデルでは扱えなくなってしまうのである。(22)(23)も同様である。

- (21) (旅行の計画を立てた時にその場になかった花子に、あとで予定を聞きに行った。聞いてきた花子の予定を他の旅行メンバーに伝える時の発話)  
昨日話してた旅行、花子は10月まで仕事で忙しいみたいだよ。(作例)
- (22) (クリスマスの日、帰り道でケーキを買ってくるよう言われていた人の発話)  
ただいま。ケーキ、駅前のお店は混んでたからさ、結構遠いところまで行ってきちゃったよ。(作例)



- (23) (ビール好きの話者の希望に反して、忘年会はワイン専門店で行うことに決まった。  
その決定の後で呟く発話)

忘年会のお店、僕はワインよりビールが飲みたかったな…。 (作例)

しかし、ここで、(21)(22)(23)も無助詞構文であることに変わりないという点は重要である。つまり、例えば(21)でも、(19a)などと同様に、無助詞名詞句が後続節に対して主題的機能を果たしていると言えるのである。本稿ではこの点を重視し、代名詞的要素の復元の可否に関わらず、(21)と(19a)などは同様に分析される必要があると考える。

### 3. 2. 代名詞的要素の復元による容認度の低下

左方転位モデルに見られるもう一つの問題点は、(16)の基準を満たす無助詞構文であっても、有形の代名詞的要素を復元した場合に不自然に響く例が観察されるという点である。例えば、(24a)(25a)は山泉(2013)で無助詞構文の例として挙げられているものであるが、それに有形の代名詞的要素を復元した(24b)(25b)は、少なくとも本稿筆者や筆者の周囲の日本語母語話者にとってぎこちなく感じる。

- (24) (話者の家の玄関から靴を履いて帰ろうとしている人へ)

a. くつべら使う? (山泉 2013:449)

b. ?くつべら {それを/それは} 使う?

- (25) (家族に)

a. 郵便屋さんもう来た? (山泉 2013:449)

b. ?郵便屋さん {彼が/彼は} もう来た?

なお、左方転位モデルでも、(26)のように、代名詞的要素の復元によって文が不自然になり得ることが述べられている。

- (26) 「省略されている *pronominal* に形を与えた場合、結果としてできる文が元のコンテキストで原文よりも不自然になることがあり得る。形式が違えば機能・意味が違うのが言語の常態であるから、ゼロになっていると正しく想定されているものに形を与えた場合でさえ、ゼロのままの文とは適切に使える場面が厳密には異なってくることは当然予想されることである。」(山泉 2013:457 脚注 16)

## 4. 日本語の名詞修飾節から見た無助詞構文

本節では、前節で見た問題点を解決するために、同様の論点を持つ研究として、日本語の名詞修飾節に関する議論(特に Matsumoto 1988, 松本 1993)を4.1節で概観する。続

く4. 2節では、松本が指摘する問題点と、左方転位モデルに見られる問題点の平行性を指摘し、新たに提案される無助詞構文の分析モデルが満たすべき条件を確認する。

#### 4. 1. 名詞修飾節の統一的分析

松本によれば、従来、日本語の名詞修飾節の研究では、(27a)のような、主要部名詞句と同一指示の空所を節内に持つものが中心的に取り上げられてきたという。しかし、そのような例を基にした分析は、(28)(29)のように空所のない名詞修飾節には適用できないという問題を抱えることとなるのである。

(27) [[本を買った] 学生] はどこですか。(Matsumoto 1988:166 漢字かな表記に改めた)

(28) このごろ [[トイレに行けない] コマーシャル] が多くて困る。(松本 1993:102)

(29) [[頭の良くなる] 本]でも買っていらっしゃい。(松本 1993:102)

松本は、これらの例を統一的に扱うためには、空所の有無に関わらず、意味的・語用論的な要因を基にした分析が必要であると述べる。実際に、空所と主要部名詞との同一指示という構造的要因によって解釈されているようにも見える(27)の「本を買った学生」であっても、使用状況によって、少なくとも(30)の3通りの解釈があり得る。つまり、(27)も、実際には意味的・語用論的要因によって成立し、意味解釈が決定されているのである。

(30) a. the student who bought the book

b. the student from whom (x) bought the book

c. the student for whom (x) bought the book (松本 1993:103)

#### 4. 2. 左方転位モデルが持つ問題点との平行性

松本が名詞修飾節に関して指摘した問題点は、左方転位モデルが持つ問題点と平行的であると言える。なぜなら、松本以前の名詞修飾節研究が、(27a)のような一部の名詞修飾節を分析の基本に据えていたのと同様に、左方転位モデルも、無助詞構文の一部である(16)を満たす例のみを分析の対象としているからである。

そして、松本が(29)のような例を分析の基本に置き、意味的・語用論的要因を基にした分析が必要であると主張したことから類推的に考えると、新たに提案される無助詞構文の分析モデルには、以下の2点が必要であると言えよう。1点目は、新たな分析モデルが、(16)の基準を満たさない無助詞構文、すなわち、(21)のような無助詞構文を基本に据えたものである点である。もう1点は、無助詞構文の成立と意味解釈が、代名詞的要素の貢献によるものではないと分析される点である。

## 5. 提案と考察

本節では、前節で設定した2つの条件を満たすモデルとして、構文文法 (construction grammar) の枠組みで提唱されている「構文 (construction)」の概念によるものを提案する。具体的には、まず、5. 1節で、構文の概念を確認した上で、無助詞構文が構文を成しているとするモデルを提案する。続く5. 2節では、本稿で提案するモデルが、これまで無助詞構文に関して指摘されてきた事実と矛盾しないことを示す。

### 5. 1. 構文文法理論からの新たな分析モデルの提案

まずは、構文文法における構文の概念を簡潔に紹介しておこう。構文とは、(31)(32)に見られるように、特定の形式と特定の意味の組み合わせから成る、記号的なユニットであると定義される。つまり、構文全体が意味を持ち、かつ、その意味は、構文の部分を成す要素などの意味に還元できない慣習的な側面を持つということである。

- (31) 「構文文法では、文法的構文は、他の統語理論におけるレキシコンのように、形式と意味の組み合わせから構成されており、その組み合わせは少なくとも部分的に恣意的なものとされている。[...] したがって、構文は、[...] 基本的に記号的 (SYMBOLIC) なユニットということになる。」(Croft 2001:18 訳と太字はクロフト 2018 による)
- (32) 「[...] 構文文法は、すべての文法的複合体が構文、すなわち特定の形式に特定の機能や意味が組み合わせられたものから成る慣習化された記号的ユニットであると主張する。」(Diessel 2004:14–15 訳は本稿筆者による<sup>8)</sup>)

この構文の概念を基に考えると、無助詞構文に関する以下の分析モデルが提案できる。すなわち、無助詞構文は、(33) の形式と (34) の意味とが組み合わせられたユニットを形成しているというものである<sup>9)</sup>。言い換えれば、無助詞名詞句と後続節との意味関係は、構文の部分を成す代名詞的要素ではなく、(34) の構文の意味が保証するものであるというモデルである。なお、(33) の後続節における「 $\phi$ 」は、後続節中に代名詞的要素が生じていないことを表す<sup>10)</sup>。

(33) [[X  $\phi$ ]<sub>NPi</sub> [...  $\phi$  i...]<sub>CLAUSE</sub>]

(34) a. 無助詞名詞句と後続節とは語用論的に関連がある

b. 無助詞名詞句の指示対象を主題として設定<sup>11)</sup>し、後続節でそれについて述べる

さて、本稿のモデルが予測することとして、(16)を満たしていても、使用状況によって異なる解釈が優先される無助詞構文が存在するはずである。そのような例として、(35)が挙げられる。

- (35) (AはBと一緒に牛丼を作った。隣の部屋にいるCも一緒に牛丼を食べるかどうかに聞いてきたBがAに言う)  
牛丼、Cはもう食べたみたいだよ。

(35)は、確かに(16)の基準を満たす例、すなわち、構造上、「牛丼」と同一指示の代名詞的要素が復元可能な例である。しかし、この例には、それ以外の解釈もあり得る。例えば、Cの食べたものが「牛丼」ではなく、「昼ごはん」などである場合である。実際に、(35)の文脈では、Cが(たまたま)「牛丼」を食べたのだと解釈されることの方がむしろ少ないのではないだろうか。本稿のモデルでは、このような例であっても問題は生じない。なぜなら、本稿では、(35)の成立と意味解釈を、代名詞的要素ではなく、無助詞構文全体が持つ(34)の意味に求めるからである。

## 5. 2. 先行研究との適合性

本節では、前節で提案したモデルが、無助詞構文に関して従来指摘されてきた3つの事実と矛盾しないことを確認する。具体的には、それらの事実が有形の代名詞的要素の存在に動機づけられたものではなく、無助詞構文の構文的意味からでも十分説明できることを述べる。以下、先行研究による指摘を(36a)(37a)(38a)に挙げ、それに対する左方転位モデルの説明を(36b)(37b)(38b)に挙げる。

### (36) 語順について

- a. 主題性がある無助詞名詞句は文頭にあることが多い(野田1996など)
- b. 「左方転位の構造から当然のことと理解できる」(山泉2013:452)

まずは(36)であるが、本稿のモデルは(36a)の事実と矛盾しない。なぜなら、(36)は、代名詞的要素とは独立した要因によるものと言えるからである。むしろ、(36)は、無助詞構文の構造がその構文的意味に動機づけられていることを示すと考えられる。主題の設定という機能は、その性質上、より文頭に近い位置で果たされる方が自然だからである。

### (37) 「は」を伴う名詞句との違いについて

- a. 無助詞構文は、「は」を伴う構文に比べて「発話の時点ではじめて題目を現場から切り出して来て設定するという印象がある」(尾上1996など)

- b. 左方転位要素でアナウンスされる主題が「それまでは主題として確立しておらず、左方転位要素としてアナウンスされた時点でそれに対する共同注意が成立し、続く節でようやく主題となるということをとらえたもの」(山泉 2013:452-453)

続いて、(37)である。本稿のモデルは、(37a)とも矛盾しない。(37)は、無助詞構文の発話時点において、無助詞名詞句の指示対象の活性度が比較的低い傾向にあることを指すと思われる。しかし、この活性度の低さは、代名詞的要素の存在が作り出すものではない。なぜなら、(21)のように代名詞的要素が存在し得ない例であっても、無助詞名詞句の指示対象の活性度が低く、主題として確立していないことが自然だからである。

### (38) 無助詞にふさわしい条件

- a. 無助詞にふさわしい条件は、無助詞名詞句の指示対象が「話し手・聞き手間における固有の先作文脈によって共有知識となっており、しかも聞き手の頭の中である程度活性化されている場合」である(大谷 1995:293)
- b. 左方転位要素が「同定可能だが、そこでの話の中心と言えるほどには活性化していないということに相当する」(山泉 2013:453)

(38)に対しても、本稿のモデルは矛盾せず説明を与えることが可能である。(38)も、(37)と同様、無助詞名詞句の指示対象が、発話時点において活性度の比較的低い状態であることを指していると考えられる。したがって、(37)での議論と同様に、本稿のモデルは(38)とも矛盾しないのである。

## 6. おわりに —課題と展望—

本稿では、左方転位モデルに残された問題点を解決するために、構文文法の観点から、新たなモデルを提案した。そのモデルでは、無助詞構文は形式と意味のユニットを成すと捉えられ、その成立と意味解釈に貢献するのは代名詞的要素ではなく、無助詞構文が持つ構文的意味であると分析された。

しかし、本稿では考察できなかった点も多い。その一つに、「代名詞的要素の挿入条件」の検討がある。本稿では、日本語の無助詞構文の成立には代名詞的要素は貢献しないとしたが、例えば(19)のような、比較的 naturally 代名詞的要素が挿入できる例も確かに存在する。代名詞的要素の挿入条件や、有形の代名詞の有無による意味の違いといった問題は、今後の課題とせざるを得ないが、仮にこれらが左方転位構文や無助詞構文の機能と独立したものであるとすれば、本稿の主張を裏付けることができるであろう<sup>12</sup>。

最後に、展望を述べる。無助詞構文の研究は、他の構文の研究に対しても影響力を持つと考えられる。例えば、日本語記述文法研究会(2008)や益岡(1997)が述べるように、

「あいだ(に)」などの形式名詞を伴う従属節には、(39)(40)のように、助詞の有無によって異なる意味が表されるものがある。

- (39) a. \*私が留学しているあいだ、両親が離婚した。(日本語記述文法研究会 2008:186)  
b. 私が留学しているあいだに、両親が離婚した。(日本語記述文法研究会 2008:186)  
(40) a. \*しばらく見ないあいだ、大きくなったね。(日本語記述文法研究会 2008:187)  
b. しばらく見ないあいだに、大きくなったね。(日本語記述文法研究会 2008:187)

しかし、この構文に関する興味深い現象として、(39a)(40a)のような助詞のない形式であっても、(39'a)(40'a)のように「そのあいだに」を挿入することで、(39b)(40b)とほぼ同じ意味を表せると思われるのである。

- (39') a. 私が留学しているあいだ、そのあいだに両親が離婚した。  
(40') a. しばらく見ないあいだ、そのあいだに大きくなったね。

仮に、(39)(40)の従属節を「あいだ」を主要部とする無助詞名詞句と分析することが許されれば、従来「末尾に名詞を伴う従属節」と分析されてきたこのような構文は、さらに新たな観点からの分析が可能になるのではないだろうか。無助詞構文の研究には、このような文法現象をも取り込んでいける射程の広さがあるように思われる。

## 参考文献

- 尾上圭介(1996)「主語にハもガも使えない文について」『認知科学会第13大会ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐる」』。  
大谷博美(1995)「ハとガとφ-ハもガも使えない文-」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)単文編』:287-295,くろしお出版。  
加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』,ひつじ書房。  
荻宿紀子(2014)「無助詞」研究の現状と課題」早稲田大学教育・総合科学学術院『学術研究(人文科学・社会科学編)』62:147-162。  
黒崎佐仁子(2003)「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2:77-93。  
小屋逸樹(2007)「無助詞コンピュータ文:その発話行為的性格について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』38:1-20。  
三枝令子(2005)「無助詞格:その要件」『一橋大学留学生センター紀要』8:17-28。  
日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法6 第11部 複文』,くろしお出版。  
丹羽哲也(2006)『日本語の題目文』,和泉書院。  
\_\_\_\_\_ (2014)「無助詞」日本語文法学会編『日本語文法事典』:602-603,大修館書店。

- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』, くろしお出版.
- 長谷川ユリ (1993) 「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80:158–168.
- 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011) 「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏編『言語研究の技法：データの収集と分析』:43–72, ひつじ書房.
- 藤原雅憲 (1992) 「助詞省略の語用論的分析」『日本語論究 現代日本語の研究』3:129–148, 和泉書院.
- 益岡隆志 (1997) 『複文』, くろしお出版.
- 松本善子 (1993) 「日本語名詞句構造の語用論的考察」『日本語学』12 (11), 明治書院.
- 山泉実 (2013) 「左方転位構文と名詞句の文中での意味的・情報構造的機能」西山佑司編『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』:431–457, ひつじ書房.
- Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*, Oxford University Press. [『ラディカル構文文法』山梨正明監訳, 渋谷良方訳 (2018), 研究社.]
- Diessel, Holger. (2004) *The Acquisition of Complex Sentences*, Cambridge Press.
- Gregory, Michelle L., and Laura A. Michaelis. (2001) “Topicalization and left-dislocation: A functional opposition revisited” In *Journal of Pragmatics* 33. 1665–1706.
- Lambrecht, Knud. (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus and the Mental Representations of Discourse Referents*, Cambridge University Press.
- \_\_\_\_\_. (2001) “Dislocation” In Martin Haspelmath, Ekkehard König, Wulf Oesterreicher, and Wolfgang Raible (eds.), *Language Typology and Language Universals: An International Handbook 2*. Walter de Gruyter. 1050–1078.
- Matsumoto, Yoshiko. (1988) “Semantics and Pragmatics of Noun-Modifying Constructions in Japanese” In *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 166–175.
- Strawson, Peter F. (1971) “Identifying reference and truth-values” In D. Steinberg and L. Jakobovits (eds.), *Semantics*. 86–99. Reprinted from *Theoria* 30, 1964. 96–118.
- Yamaizumi, Minoru. (2011) “Left-Dislocation in Japanese and Information Structure Theory” In *NINJAL Research Papers 1*. 77–92.
- \_\_\_\_\_. (2018) “Reconsidering the Layered Structure of the Clause in Japanese: Focusing on the NP-wa and Left-dislocation.” In 大阪大学言語社会学会『EX ORIENTE 25』. 47–89.

<sup>1</sup> “The detachment [...] construction can then be defined pragmatically as a grammatical device used to promote a referent on the Topic Acceptability Scale from accessible to active status [...]” (Lambrecht



1994:183)

- 2 “[A] general correlation between the activation and identifiability states of topic referents and the pragmatic acceptability of sentences” (Lambrecht 1994:165)
- 3 “to give or add information about what is a matter of standing current interest or concern” (Strawson 1964:97)
- 4 Lambrecht (1994) でも、左方転位構文と主題化構文の機能の違いに関する以下の予測が述べられている。なお、“accessibility”は活性度のことを指す。“Topicalization generally seems to require a higher degree of accessibility than left detachment, but much empirical research is necessary before any substantive claims can be made to this effect.” (Lambrecht 1994:195)
- 5 なお、ここでの「格助詞」には、「は」も含まれる。
- 6 「アナウンス」も「設定」も、以下の引用の太字部分に由来するものである。“[T]he order topic-comment [of Left Dislocation] signals **announcement** or **establishment** of a new topic relation between a referent and a predication” (Lambrecht 2001:1074 太字は原文による)
- 7 “This criterion has a limitation in that it does not work for what Lambrecht (2001) calls unlinked-TOP construction [...], where the dislocated element has no semantic or syntactic relation to the following predicate and does not play any role as an argument or adjunct.” (Yamaizumi 2018:83 脚注 8)
- 8 “[C]onstruction grammar argues that all grammatical assemblies are constructions, i.e. conventionalized symbolic units consisting of a specific form paired with a specific function or meaning” (Diessel 2004:14–15)
- 9 無助詞構文の形式や意味として記述されるべき特性は、当然、これだけではない。例えば、Yamaizumi (2018) が指摘するプロソディの特徴や、藤原(1992)や小屋(2007)が指摘するような、「動能的機能」や「発話行為的な効果」なども含まれると考えられる。
- 10 本稿では、(34b)に見られるように、無助詞名詞句の指示対象が主題として設定されるタイプの無助詞構文を中心に議論を行った。(17B)のような、無助詞名詞句の指示対象が焦点として設定され、かつ代名詞的要素の生起が義務的である構文についても、(34)の構文を含む構文のネットワークに位置付けられると考えているが、これについては別稿を用意したい。
- 11 ここで用いた「設定」とは、2.2節で見た英語の左方転位構文における「主題設定 (topic establishment)」と完全に一致するわけではない。具体的には、以下の『名大会話コーパス』(藤村・大曾・大島 2011による。相槌等は一部省略した)の例に見られるように、日本語の無助詞構文では、無助詞名詞句が active な指示対象を表わす照応詞の場合もあり得る。

(F156 がアルバイト先でごまだんごをもらった話)

F156: ごまだんごがあって、ごまだんご食べたの。

F156: あれさーすごいおいしかったけどさー、油で揚げてあるでさー、かじるとジュワーっと、油っこくってー結構ねー、油こかった、あれは。

F143: あー、あれおいしいよね。でもあれ、好き嫌い分れる。

- 12 (i) や (ii) の容認性の差に見られるように、「pronominal の挿入可否条件」の一つには、後続節が焦点構造を持つかどうかに関わっているように考えられる。これについては稿を改めて考察したい。なお、以下の例では焦点を下線で表す。

(i) a. (ケーキを見つけた娘に「このケーキ、誰が買ったの?」と聞かれて)

ケーキ、お父さんがそれを買ってくれたんだよ。(作例)

b. (帰りに牛乳を買ってくるよう頼まれていた父が帰宅して言う)

?ただいま。牛乳、それを買ってきたぞ。(作例)

(ii) a. (友人宅の書架に、自分のずっと欲しかった CD があるのを見つけて指差して言う)

この CD、どこでそれを買ったの?(作例)

b. (おすすめの言語学の本を友人に尋ねたところ、読んだことのある本を薦められた)

?その本、もうそれを読んだよ。(作例)